

# 草庵仏教

第230号  
(発行日)

2009年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

# 不退転を賜る

私たちは今までどれほど多くの教えとか教訓とか訓戒とかを聴いてきたであろうか。どれほど多くの感動すべき尊い話とか有難い話を聴いてきたであろうか。たしかにそういうさまざまな「善いお話」は人に影響をおよぼして、その国の道徳感や倫理感ともなり、社会秩序の安定に寄与してきたと思う。

ただそうした「善い話」を聴いてきた私たちが、自分自身に立ち返り、我が身の現実がこうした善い話に添うような身になったのであろうかと自省するとき、そうした道徳とか教訓とか訓戒がなお真に身に付いていないことを感じるのである。ということは「聴いてきたにもかかわらず」退転に退転を重ねてきたのが今の自分である、そういう実感をもつのである。

「仏教の教えは慈悲の教えである。人を慈しむ行いをしなさい」と教えられ、キリス

ト教でも「隣人を愛しなさい」と強調されている。

ではそう教えられて、その様な生き方ができるかといえ、実際にはとてもできるものではない、と感じるのである。慈悲行がなせないどころか、自分の心の冷たさがいつそう知らされる。

親鸞聖人はご和讃に「小慈悲もなき身にて 有情利益はおもうまじ」といわれ、ご自分には小さな慈悲すらなきことを悲しんでおられる。しかも「有情利益はおもうまじ」とまで申され、「小さな慈悲心すらない私が、自分の力で他の人々を救おうなどとはもはや思わない」とまで仰せられてはいる。

しかしそれは裏を返せば、他の人々を何とか救いたい、救われなければならぬと真に自分の問題にされたからであろう。他の人々の幸せに無

関心なら、このようにご自分を悲痛されることもないであろう。「他者の幸せ」を考え、どうしたら他者が救われるのかをいつも願っておられたのではなからうか。それゆえ「小慈悲もなき身」と慚愧さんきされるのである。聖人にとって利他ということは生涯を貫いての願いであつたと思われ。晩年に還相回向を強調されたのはこういう問いがあつたからであろう。

話をもとにもどすと、道徳的教訓や倫理の話をたくさん聴けども、我が身はなかなかお話の通りにはなれないということ、それは世間の倫理上だけのことではない。仏法のお説教で縁起の道理が説かれ「私たちはありとあらゆる物や人のおかげで生きている、それを自覚しなさい」と教えられたり、あるいは無我の教説では「我というものは本来無いものである。だから我に執着して、我を張ってはならない」とも説かれる。しかるに、どれほどそう聴いても、「オレはオレの力で生きていく」という自我への固執が取れないのである。

## 《盂蘭盆会法要》

8月10日(月)

午後2時始まり

なるほど、自分を何とか善い者にしよう、高めよう、改善しようとなねに心がけていくなら、それなりに感謝もでき懺悔もでき、柔和な気持ちにもなるかもしれない。しかしなかなかそうした強い求道心をもち続けることは難しく、ともするとゆるんで自堕落になつてしまう。そして何か事が起こると、もとの自分、元の木阿弥もくあみに戻っている。

古いにしへの仏道修行者にもこの悩みがあり、おそれがあり、悲しみがあつた。仏道精進の坂道を難行苦行して上がっていったも、ちよつと気を緩めたり怠けたりすると、転がり落ちて、以前の自分に戻ってしまう。

仏教学を熱心に習得し、多くの教理は憶えても、本当に

は教えが自分の身に付いていないという現実、どれほど多くの仏教者を悲痛せしめたかことか。

聖人は天台宗の修行僧として比叡山で二十年も仏道修行されたが、どれほど修行し学問しても、変わっていない自分におよびがたき身」と、ご自分を悲しまれたのではなかったか。いわゆる仏道から「退転してしまおう自分」に困り果てられたのであろう。

このことは真宗の聴聞においても同じである。私たちは聞法に励み、仏法聴聞に力を入れ、法をお聴かせいただく。時には喜びが起こり、時には感激もしよう。何度も「なるほど」と納得したり、(本当)にそうだと頷くこともしばしばあるであらう。しかし、ふつと我に返ると、一つも仏法が身に付いていない自分がここにいて、ということに愕然とする。

そうして、退転して、退転して、無仏法、無信の者とは、まさに自分であるとまで思い知られされる。

これは仏教における求法だけの話ではなく、「退転する私」は、何時の時代のいかな

る地域の中にいる人々の歴史においても、人がぶつかる悲しみであり嘆きではなからうか。すくなくとも、「まことを求め、まことの人でありたい」と願い、少しく真面目に自らを変えたい、より善い人間になりたいと励むなら、退転する自分に悩まざるを得なくなるのではなからうか。

しかるに、本願念仏の教えをよくよく聞かせていただく、この(退転する私)をすでに知りたまひ、この者を全面的に受け入れてくださる阿彌陀仏のましますこと、そのことを知らしていただく。阿彌陀仏が、転がり落ちる私。そこにすでにちゃんと両手広げてまわってくださったのである。

この阿彌陀仏の摂取の御手におさめとられるとき、私の行いの善し悪しや能力の優劣や賢愚などに一切関係なく、阿彌陀仏から離れない身すなわち「不退転の身」に定めてくださること、その不可思議な恵みを知るのである。こうして願うべき(浄土への不退転)は阿彌陀仏から全面的にたまわるのであった。(了)

# 正信偈に学ぶ問答

## (十八)

### 普放無量無辺光

無碍無对光炎王

清浄歓喜智慧光

不断難思無称光

超日月光照塵刹

(書き下し文)

普く、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放つて、塵刹を照らす。

\*

G 「次ぎに歓喜光とはどういう意味でしょうか」

D 「阿彌陀仏の光明はその光明にふれた人に歓喜を生ぜしめてくださる、そういう徳のある光が阿彌陀仏の歓喜光であると讃えられています」

G 「歓喜とは文字の上からいうと、歓も喜もどちらもよろこぶということですね」

D 「ええそうです。ただ宗祖は歓喜をさらに歓と喜と分けて、味わっておられます。

歓喜というは、歓は、みをよろこばしむるなり。喜は、

り。

と仰せられています。すなわち阿彌陀仏の光明は歓喜光にましますから、この光にあっては身をよろこばし、心に喜びを与えて下さると仰せられるのです。身にも心にも、喜びを与えてくださる、と申されるのです」

G 「なぜそのような喜びが与えられるのでしょうか」

D 「それは阿彌陀仏の光に現在おさめ取られたゆえであり、また一生が終われば、必ず浄土に至り、涅槃のさとりを得しめてくださるとの希望のゆえです。罪深い身が、そういう広大な功德にあずからしていただけた、と喜ばざるをえなくなりました。そして歓喜光はことに私どもの瞋恚・憎嫉の罪を悲しみたまひ、これらの罪を除きたもう光なのです」

G 「なぜ瞋恚・憎嫉の罪が除かれるのですか」

D 「(阿彌陀如来名号徳)という書に聖人は、阿彌陀仏は本法蔵菩薩として御修行したまひし時、(無瞋の善根をもつて得たまへるひかり)が歓喜光だから、その光にあうものは、ついには瞋恚・憎嫉の煩惱の罪を除去してくださると、仰せられています」

G 「それほどの功德を与えてくださるにもかかわらず、私たちは阿彌陀仏の光にであつても、実際にはそれほど喜べないのはどうしてですか」

D 「それは煩惱によって心の眼が濁っているから、浄土に至るべき身に定まったということの意味がどれほど素晴らしいのか、どれほど有難いことなのか分からないからでしょう」

G 「私たち凡夫は煩惱によって仏の功德の広大なことが実感できないのですね」

D 「ええ、煩惱の心しか知らない私たちに、煩惱の除かれた智慧と慈悲の完成した心にしてあげようといわれても、あるいはこの濁世しか知らない私たちが清浄で安らかな領域である浄土へ至らしめてやるといわれても、そんなに喜べないのは私たちが煩惱が深

く愚鈍のためであります」

**G** 「浄土に生まれさせてやる  
といわれるよりも一億円の宝  
くじが当たった方が嬉しいの  
が凡夫かもしれませんね」

**D** 「そもいえますが、ただ  
阿弥陀仏にであったものは今  
ここで大いなる喜びが与えら  
れるのは間違いないことで  
あって、それはこの世のなか  
の財宝とか名誉とか快樂など  
を得る喜びとは質の違う深い  
喜びです。宗祖は

**慈光はるかにかぶらしめ**

**ひかりのいたるところには**

**法喜をうとぞのべたまう**

**大安慰を帰命せよ**

と仰せられています」

**G** 「必ず浄土に生まれさせて  
いただけるという安堵感があ  
るだけではなくて、今ここで  
阿弥陀仏にであって撰取され  
たことの喜びがあるのです  
ね」

**D** 「そうなんです。喜びを現  
在と未来に分けて味わうこと  
ができます。そういう時、宗  
祖はわざわざ〈歡喜〉と〈慶  
喜〉に分けて教えてください  
ます。歡喜は将来与えてくだ  
さる成仏の果を今から喜ぶこ  
とをいい、慶喜とは現在阿弥  
陀仏に撰取されている喜びを  
いうのだと仰せられています

す」

**G** 「無量寿経に歡喜踊躍と説  
かれ、阿弥陀仏にあえば、躍  
り上がって喜ぶとまで釈尊は  
お説きになつていますが、そ  
んなに喜べるものでしょう  
か」

**D** 「私たちが日常生活でどれ  
ほど喜べるかということとは  
もかく、無量寿経に歡喜踊躍  
とまで仰せられて、躍り上が  
って喜ぶとまで仰せられてい  
るのは、仏法の徳を讚歎され  
たお言葉であるといえましょ  
う。すなわち仏法はそれにあ  
えば躍り上がって喜ぶべきほ  
どの有難く尊い法であるとい  
われるのです」

**G** 「踊躍歡喜は仏法を讚える  
言葉でもあるのですね」

**D** 「そうなんです。実際、踊  
躍歡喜と説かれるほど、とて  
も私自身は喜べません。けれ  
ども仏法にであえば喜びは自  
ずから与えられます。それは  
間違いないことです。もち  
ろんいつも喜べるということ  
はありませんが、ほそぼそな  
がら喜びは続いていくもので  
す。信心の現実的な内容はこ  
うした喜びであるといっても  
いいでしょう」

**G** 「喜びは続くのですか」

**D** 「心の表面に起こる喜びは  
とぎれとぎれであつて、何と  
もない時がほとんどかも知れ  
ません。しかし心の底には静  
かな喜びは流れているといっ  
ていいのではないでしょう  
か。だから喜びを實際に感じ  
るとともに、喜びの乏しいの  
が嘆かれてきます」

**G** 「日常生活での法の喜びは  
具体的にはどういうものでし  
ょうか」

**D** 「それはいろいろな縁にお  
いて、阿弥陀仏の大悲を感じ  
るからです。〈ここにおるぞ、  
汝を助けるぞ〉の大悲心であ  
り、〈我が名を称えよ〉の仰  
せに慈悲を感じるのです」

**G** 「〈助ける〉との阿弥陀仏  
の仰せが有難いのですね」

**D** 「そうです。ただもう一つ  
いえば、そういう法に触れて  
起こる有難い感情もさること  
ながら、有難いのはむしろ根  
本気分に関わる点です」

**G** 「仏法を頂くと根本気分が  
どうなるのですか」

**D** 「阿弥陀仏の歡喜光に触れ  
ると、私どもの人生における  
根本気分が変わるのではない  
でしょうか。それは闇に光が  
入ると、暗くてうっとうしい  
闇の中に明るさが与えられる

ようなもので、人生全体に静  
かな満足感が与えられるので  
す。人生の基礎に満足が与え  
られる・それが〈歡喜〉とい  
うことの基本的な意味ではな  
いかと私は思っています」

**G** 「阿弥陀仏の大悲に感激し  
て、涙を流すような喜びなど  
はどうなのですか」

**D** 「そういうような感情の  
高揚としての喜びは起こるこ  
ともありますが、それはむしろ  
一時的です。有難いには違  
いないが、どこまでも心理的  
なものですね。昔、ある信心  
深い奥さんが、有り難さの余  
り涙が出たりすると、〈ああ  
また、癖が出ました〉と、す  
つと捨てられたと聞いていま  
す。自分の心の感激をあてに  
はしないのですね。自分の感  
激や感情の高揚などにこだわ  
らないのです」

**G** 「そうですね。では悲しみ  
とか辛いとか苦しいとかいう  
思いは起こらないのですか」

**D** 「いえない、たとえ本願を  
信じ歡喜といわれるような功  
徳が与えられても、日常生活  
は悲喜があり苦楽があり、心  
の浮き沈みが当然ありましょ  
う。それどころか、苦しくて  
しんどくて、ああ辛いなあと

いう思いも起こりましょ  
う。しかし心の底といえますか人  
生の底に如来の大悲の心が流  
れていくのださるのです」

**G** 「苦しんだ悲しんだり、辛  
いなあと思うこともあるので  
すね」

**D** 「生涯、悲喜苦楽のわずら  
いから離れられないのです  
ね。悲しいことですが」

**G** 「日常生活では心理的な現  
象として心が明るくなったり  
暗くなったりすることは当然  
あるのですね」

**D** 「ええそうです。ただ、我  
が心の暗さや明るさを見て、  
救いの確かさを確かめるので  
はありません。有難いという  
思いがどれほど強くても、そ  
れが救いの確かさにはならな  
いし、有難い思いが乏しいか  
らといってお助けが不確かに  
なるのではありません。我が  
心の明暗に救いの確かさを求  
めないのです。救いの確かさ  
は如来様の願力にあり、仰せ  
にあります。だからどこまで  
も仏の願力を仰ぐばかりであ  
つて、自分の心の影である明  
るい暗いにお助けの証拠を見  
るのではありません」

# 信心夜話

ゴチツクの字が松並さんの言葉。

\*

○おひつのご飯は、だれだれのと言う区別はない。家内中のご飯である。私の茶わんに入ったご飯は、私のご飯である。私の口から現れて下さるお念仏は、私自身への名指しの呼び声であります。南無阿弥陀仏

（おひつのご飯は家族みんなのものであるが、そのままでは食べたくても食べられぬ。阿弥陀様といってもお念仏がなければおひつのご飯と同じで、みんなのものかもしれないがすぐには私なものにはならぬ。口に出たもうお念仏は一人一人に与えてくださる茶碗のご飯のようなものである。お念仏になつて喚んでくださいばこそ、愚かな凡夫でもそのままいただけるし、腹もふくれる。大悲の阿弥陀様は極めて具體的な身になってくださる。ナムアマダブツ。）

○「東京行き東京行き」と呼ぶ声に応じて、乗り込めば東京に着く。この電車はどうして東京へ着くのか、動くのかと、その講釈聞かねば、知れなければ、

かつて、東京へは行けぬ。聞きたければ南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、乗ってから聞くが

よい。講釈聞き終わらぬ内に、東京に着く。わからなくても、東京に着けば聞いた事になる。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と乗ればよい。南無阿弥陀仏 知れなくても、東京に着けば知った事になる。南無阿弥陀仏

（弥陀の本願は不可思議の願である。《そのままなりで助ける》《称えるばかりで助ける、その他に何もいらぬぞ》との仰せを聞いて、《本当にこのままなりでよいのだろうか。そのわけを知りたい》《浄土とか阿弥陀仏は本当にあるのだろうか》《私の何が助かるのだろうか。何が浄土に生まれるのか》などなど、考えてみるといういろいろな疑問が湧く。こうしたさまざま疑問が解決されないかぎり、阿弥陀仏の仰せを受け入れない、信じないというなら、愚かな凡夫はいままでたつても助からぬ。道理理屈が分かつて助かるのではない。分からねぬまま、今ここに《引き受ける。助ける》と仰せ下さる大悲。

《こんな私のためだったか》と聞くばかり。理屈離れて浄土行きの電車に乗るばかり。聞かまが乗ることになる。助かる道理理屈は乗ってから、いくら

でも学べばいい。少ししか学ばないうちに浄土に至る。浄土に至れば百法明門で、みな分かるとのこと。だから明日でも明後日でもない、何も分からぬ今の私に今喚んでくださる今のお助けを今聞くだけ。)

○橋の上から、溺れている者に、橋の上から、助けてやるぞと呼んでくれても、溺れている者は助からない。子供の助かる道はただ一つ。溺れている水の中へ、親が飛び込んで、子供の体を、袷をつか掴んで、体をだきしめて助けるよりほかに、方法は無い。そのつかまれた、だきしめられた姿が、今、南無阿弥陀仏と、聞えて来る。

南無阿弥陀仏の、活きた仏の声が、南無阿弥陀仏であります。

（おぼれかかり、落ちかかっている今の私を、つかみたまう活きた阿弥陀様の声が今のお念仏なのですね。おぼれかかっている私に飛び込んできて下さり、えりを掴んで、《汝をはなさんぞ、助けるぞ》の生きた仏の声が今のナムアマダブツ。私を離れた遠い仏様では、間に合わぬ。《このままのち絶えればまた迷わねばならぬ》という我が身の危うさを知らずにうかうかしている私を、如来様は危ないと知りたまい、行く末を心配せずにいる私を案じたもうて、急いでここまで来て下さって掴んでくださる姿が今耳に聞こえるナムアマダブツ。）

## 《任職雑感》

難しい仏教の道理や理屈をどれほど聞いてもなかなか如来様にはあえない。ところが大悲のお心を何度も何度も自身の上に聞かせて貰うと、不思議にも大悲が浸透して、如来様にあえる。とてもあえそうもなき身があえるのである。不思議なことである。決してあきらめてはいけない。難行である禅修行をするのでもなく、厳しい戒律を保つのもなく、難しい仏教書を読んで研究するのでもなく、我が身にかかられている如来様のまごころをお念仏を通して、聞きつけていくと無碍光の仏心大悲によつて、この邪見憍慢の塊である凡心に、大慈大悲の仏心が届くのである。奇なるかな、奇なるかな大悲の御心。大悲の具体的な働きがお念仏であり、如来大悲の結晶である。

## 《秋季彼岸法要》

9月22日（火）午後2時始

\*法話の後、午後4時半より帰敬式（おかみそり）を行います。ご希望の方は早めに申し込んでください。帰敬式は在家の仏弟子になる儀式で、法名が授与されます。